

第1章 阿賀野川と人々の暮らし

1 阿賀野川

阿賀野川は、その源流を栃木、福島県境の荒海山に発し、福島県内で猪苗代湖から流下する日橋川や尾瀬沼を水源とする只見川を合流して溪谷を西流し、新潟県に入ってから早出川などを合流して平野部を流れ、新潟市で日本海に注いでいます。

福島県側では「阿賀川」と呼ばれている阿賀野川は、流域面積7,710km²、延長210kmにも及ぶ日本有数の大河です。

阿賀川の「アガ」とは、仏教用語で「閼伽」（アカ、水）の意味であると言われ、水量の豊富な川とされています。また、阿賀野川の「阿賀野」とは、アイヌ語の「ワッカ」で「清い川」を意味するという説があります。

阿賀野川は、その豊富な水量を生かし、福島・新潟県境付近では水力発電が盛んであり、下流域では信濃川とともに新潟平野を形成し、農業用水のほか工業用水、水道用水などに使われています。

また、阿賀野川の流域には、多くの動植物が生息するなど自然の宝庫となっており、春の新緑、秋の紅葉、冬の雪景色など四季折々の眺めは、そこに住む人々や旅人の心を惹きつけています。

2 流域の人々の暮らし

阿賀野川は、かつて重要な交易路として、物資を運ぶ川船、木材を輸送する筏、渡し船が行き交うなど水運が栄えていました。

その豊かな水量は、日本有数の穀倉地帯である新潟平野の灌漑用水として重要な役割を果たしていました。流域に住む人々は半農半漁によって生計を立てている人が多く、季節ごとに様々な魚を捕る川漁が盛んに行われていました。

サケ、マス、ヤツメなどは売りに出さ



新潟県福祉保健部 水俣病その歴史と対策 から



荷を積んで新潟港へ下る帆船・津川港

(写真提供：徳永次一氏)

れ、ニゴイ、ウグイ、ボウなどは当時の沿岸住民の重要なタンパク源として毎日のように食卓に上がっていました。このように、川漁は流域の人々の生活の一部であり、楽しみの一つでもありました。

そのほか、川で薪にする流木を拾ったり、川の水を飲料水や炊事・洗濯に使ったり、川のこと
が常日頃から地域や家庭での話題に上るなど、流域の人々の暮らしは阿賀野川と密接に結びつ
いていました。

3 阿賀野川と人々の結びつきの変化

1914（大正3）年の磐越西線の開通などによる陸上交通の発達や昭和に入ってから
の鹿瀬（現阿賀町）、豊実（現阿賀町）などの発電所の建設等により、交易路としての阿賀野川
の役割は終わりを告げ、物流も船から鉄道、自動車などに変化してきました。

昭和電工鹿瀬工場の排水による水銀汚染が原因である1965（昭和40）年の新潟水俣病の発生
は、流域住民と川との結びつきに大きな影響を与えました。

水銀汚染については、昭和電工鹿瀬工場の排水口周辺の浚渫工事や河川の水質、川魚の水銀量
調査などの結果から、1978（昭和53）年に人工的汚染の影響が解消されたことが確認されまし
た。その後の調査においても基準を達成しており、良好な河川環境が維持されていますが、食生
活の変化もあって、川漁をする人は少なくなっています。

今日、阿賀野川は、農業用水、工業用水、水道用水に活用され、河川公園には多くの人々が集
うなど、時代とともに川と人々との結びつきは変わりましたが、その雄大な流れは現在も変わる
ことなく親しまれています。



賑わう床固め公園

（横越町（現新潟市））

（撮影：本間一人氏 / 写真提供：国土交通省北陸地方整備局阿賀野川河川事務所）